
ガノトトスさんを狩りに行こう！

自殺肢体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガノット・トスさんを狩りに行こう！

【EZコード】

N5376C

【作者名】

自殺肢体

【あらすじ】

天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリルは初めてガノット・トスを狩りに行くことにしたのだった。

1、基本的に一人

やはり、何をするにしろ、
「初めての体験」は、異様に緊張するものだ。
まして、それが生死を分かつほどの殺し合いだったなら、尚更のこと。

ガノトトスを狩りに行く事にした。

15で始めたハンター稼業、4年目にしてやつと、ガノトトスに挑戦してみようと思ったのだ。

……しかし、この類まれな才能と美貌を併せ持つ「天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリル」の私としては遅すぎる挑戦なのだが、これにはちゃんとワケがある。

まず第一に、愛用の武器のほぼすべてが
「片手剣」だという事。

ガノトトスというヤツは、普段は水中にいるので、デカい音をだす音爆弾で怒らせて陸に上がらせるとかしないと、ボウガンや弓でない限りダメージなんてまったく与えることが出来ない。そーゆーの、なんか滅茶苦茶めんどくさくて嫌なのよ……。

第二に、私は基本的にパーティを組むことなく一人で狩りをするので、対ガノトトス用の火属性片手剣「バーンエッジ」と水耐性の強いザザミの防具一式を揃えるのに結構時間が掛ってしまったのだ。

そんなワケで、大体パーティプレイをする奴らから1、2年ほどは遅れをとっている。……まあ、1、2年の遅れで済んでいるところが、天才ハンターたる所以なんだけどね。

しかし、これはマジなんだけど、私にはいろんなハンター達からのお誘いが引く手あまたで、断るのにいつも苦労している。なぜ私が一人での狩りを好むのかと言うと、やはり飛竜ほどの大物は、一人で狩るのが醍醐味であると思っている。いや、実際そうなのだ。イヤンクックに始まり、ゲリヨス、フルフル、ダイミョウザザミ、リオレウス、リオレイアと、すべて一人で狩ってきた。

これらの勇猛で雄々しく、時には可愛いらしくもある飛竜達を、私一人の力でねじ伏せてきたのだ。誰の力も借りることなく、私人で！！ それが、堪らなく快感なのだ。飛竜と一対一で対峙してる時、私は性的興奮すら覚え、濡れもする。

そして、そんな私に付いた通り名が

「スイサイド（自殺）・シェリル」。

一人での飛竜狩りは、自殺行為とでも言いたいのだろうか？ でも、正直ちょっと気に入ってるけど。

スイサイド・シェリル！！

2、油断大敵大天才

船に揺られてやつてきました、密林へ。

支給品ボックスを確認、素早く回収し、西の砂浜へ。

すると、いきなり居た。

海面から伸びるキレイな背ビレが、自らの存在を誇示しているかのように思える。

……さて、どうするかな。

まずはペイントボールでもぶち当てる……いや、その前にそこいら辺をウロチョロしてゐるランポスどもを一掃した方がよさそうだ。

まあ、普段はランポスなんか雑魚にもならない存在なんだけど、飛竜と戦つてゐる時に限つては、ヤツらのちょっかいが生死を別ける事になるほどの脅威となつてしまふからねー。

普通に歩いて近づきつつ、バーンエッジを抜刀。すでに私の存在に気付いてゐるランポス達は、唸り声を上げつつも慎重な様子。

「そりや、慎重にもなるよねえ。私のような天……」

不意に、後ろから大きく水の跳ねる音。

それに振り返ると同時に、凄まじい衝撃が頭部を襲い、ザザミヘルムが頭から弾き飛ばされた。

「くあつ……」

為すすべもなく、私の体は後ろに倒れこむ。

確認するまでもない、今のはガノトトスの水プレス！ 完全に私に狙いを付けていた！

その背ビレはせわしなく海面を動き回っている。

「ちょっと、ヤバイ……！」

自分でも有り得ないと思つほど、油断してしまつていた。

……バカすぎる！ こんなの、天才でもなんでもない！

チャンスとばかり襲いかかつてくるランポス達を、尻餅を付いた状態でなんとかなぎ払い、ガクガク震える足を必死で立たせ、別工リアの洞窟に走り出す。

3、とつあえず落ち着け

（……情けない！ ホント情けない！ 殺し合いで来てるってのに、なんであそこまで気が緩んでたの？！）

ガノートースの奇襲に心を乱され息切れしつつ、ナナストレートを揺らしながら手近な洞窟にどうにか駆け込んだ。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！ ……ハア~~~~~」

壁に背をもたれ掛けながら、その場に座りこむ。

「ちょっと、一服……」

と、取り出した自宅から持つてきたスタミナドリンクが、緊張のあまりカラカラになつた喉を潤す。

「ふう……、気持ちいい……」

ここは、外のジメジメとしてて暑い不快な環境と違つて、ひんやりと涼しい。

傷付いたリオレイアの休眠場所でもあるこの洞窟、今はおとなしいアプケロスが数匹いるくらいで危険はなく、心を落ち着けさせるのにちょうどいい。

両手を見ると、まだ少し震えている。

たぶん、水耐性の強いザザミヘルムじやなかつたら、あの水ブレスで頭を貫かれて即死だつただろ。……そんな死にざま、バカバカしい！ 死ぬなら、やつぱり古龍クラスと戦つてじやないと！

しかしアイツの水ブレス、知識としては知つていたけど、じつさ

い喰らつてみると、とんでもない威力！ ブレスなんてものじゃなく、ガンでしょ、アレ。超高圧のウォーターガン！

「……帰ろつかなあ……」

私のもつとも悪いクセが、考えるより先に口から出てきた。

今まで何回か、あつた。

飛竜との戦いでちょっと絶望的な気分になると、クエストリタイアしてとつとと帰つてしまいたい衝動に駆られる事が。

しかし、今まで一度だつてそんな事はしなかつた。自らを天才と称する私が、ポッケ村の連中に「チキン美少女」と白い眼で見られるなんて、考えたくもない！

……大丈夫。

今日の狩りも、無事に済む……ハズ。

4、ヤツまくつの美少女（前書き）

訂正。3話のアプケロスは、アプトノスの間違いでした。アプケロスは結構、好戦的な子。

4、ヤツまくつの美少女

三分ほど休むと、ようやく私はのんのんと立ち上がった。

「んしゃ… つと。やー、もー、さつさと狩つて帰つて酒宴ー。」

勢いつて結構大事だ。さっきのは本気でヤバかったから스타コラ逃げちゃつたけど、今はイケそつた氣がする。

……自分で言つた

「酒宴」つて言葉のせいかな。お酒つて、いいものだからね！ うん！ そうだ！

「さつさと狩つて帰つて酒宴！！」

これ、今日のスローガンに決まり！

なんかやる氣が出てきたよ？！

「つふふ……、酒ー メシー 美少女ー！」

思わずよだれが垂れる。

洞窟から走つて勢いよく出ると、ガノトトスさんの背びれがのんびりと揺らいでいる。

「そーーーれー！」

テンション高く、背びれに向かつて音爆弾を投げつけると、

「キーンー」という快音とともに、驚いたガノトトスが海面から飛び上がった。

「……さあ、上がって来なさいよー！」のスイサイド・ショリルが遊んであげるんだから！！」

そう言つた瞬間、30メートル近くある巨体が大ジャンプをして宙を舞い、私の上を通り過ぎていつた。

海水がぽつぽつと、雨の降りはじめのように顔に降り注ぐ。

その光景に、一瞬見とれてしまつた。

しかし私の足はもう、その巨体に向かつて駆けていた。

「はあっ！！」

起き上がり、こちらに向きかけている顔面に対して、おもいつきりジャンプして落下の勢いのついたバーンエッジで叩き斬る。

「グアアツ！」

火属性の爆発の衝撃とともに、キレイな鮮血が飛び散つた。

「もう一撃イ！」

苦しみにうめいているガノトースを尻目に、反す刀で斬り上げる。即座に前転でふところに潜りこみ、足にむかって斬りまくる。

「それっ！一撃！一撃！三げきいっ！」

なすすべもなく私にやられまくつたガノトースは、とうとうダウンしてしまつた。

5、鉄山靠（前書き）

訂正。ガノトトスは、三十メートルもございませんでした。申し訳ない。何メートルかは知らん。

5、鉄山靠

「イケるっ！ 魚竜くん、このまま逝っちゃつかあーーー？」
やはり私は天才だつた。ただの一撃も喰らうことなく（不意討ちはノーカン）、狩れちゃうんだから！

地面を勢いよくのた打ち回つてゐる憐れな魚竜は、無慈悲な刃に斬り刻まれることしかできないでいる。しかし。

「 あつ？！」

剣を握る手には、快感とも言えた斬撃感はなくなり、岩肌にでも斬りつけてるような、重く、不快な感触が支配し始めている！

「チイツ！」

バーンエッジの切れ味はあまり良くない、ということは忘れていたワケじゃない。ただ、私はちょっとタマに大幅なドジをかますことがある、というだけのこと！

慌てる必要はない。即、その場で剣を研ぎ始めた。

・・・

「ああ、もうー！」

ガノトースはすでに起き上がる体勢、しかし私も研ぎ終わる寸前。その時。地中から二つの鋭い爪が、しゃがんでいる私の顔めがけて襲いかかってきた。反応よく、私はすぐさま後ろに顔を退く

が、相当ビビられたせいで、尻餅をついた状態に。

……ヤオザミシ！ このタイミングで！？

そして、無防備な私の眼前には、ぬらぬらした表面の、鱗が一枚いちまい確認できるほど魚竜の巨体が迫つて

「つあつ……」

宙を舞つてゐる。

相当な質量のある魚竜の横つ腹からの体当たりは、160cm程度の私の体など、簡単に十メートルは弾き飛ばした。地面に背中から激突、めちゃくちやに後ろに転がつていく。

「カツ……ハアツ……」

血を吐くが、大した量ではない。しかし、息ができない。でも、苦しんでるヒマなんかない！

距離の開いた相手に対するガノトトスの攻撃は、水ブレスしかない。ヤツはもう、美少女である私を貫く快感に震えながら、発射体勢はいつているだろう。数秒後には、確定死が待つてゐる！

呼吸なんぞ後でいくらでもすればいい！

からだ！

私の体！

死にたくないなれば動け！

動け！！

動
け
つ
！
！

6. もぐれこ（謹書也）

これで終わりです。時間を空けすぎて申し訳ない。

6、生ぐさい

チツ！

瞬間、ブレスは頬をかすめて通り抜けていった。私を貫けなかつたことに、舌打ちしたかのような音を走らせながら。

生きた！

横転がギリギリ間に合つた！

どうするー？

次はどう来るー？

……え？

愚かにもガノトトスは、またも水ブレスの発射体勢に入つていて。
……アイツ、相当あせつてると見える！
バカな子……！

ブレス後の数秒間という回復の時間を『えられた私にとつて、発射までの一、二秒は、反撃体勢を整えるのに充分すぎるほど』のブレゼントタイムツ！

一秒、息を吸い、

一秒、息を吐く。

体内にて圧縮された水を、体全体を使い、吐き出す動きに合わせ

て繰り出されるガノットトス必殺の超高圧ウォーターガン。

もうすでに落ち着きを取り戻していた私は、難なくそれを斜め前転でかわす。

あ。来た。

私、もう、勝てるな。百パーセント間違いなく。

根拠はない。

でも、確信がある。

今までも、そうだった。

この確信が芽生えて数分後には、獲物達は例外なく私の足下にその骸を晒していたのだ。

天才の確信なんだからもー、間違いない！

「ハアアアアアツ！！」

バーンエッジを強く握りしめ、ときの声を発しながら魚竜に向かつて駆けて行く。

約九分後。

「ふいー……結構しぶとかつたなあ、コイツ」

ガノットトスの死骸の横に座りこんで、思わず洟らす。

「ああ～もう、疲れた～！ 剥ぎ取りするのもめんどくさい！ あとはギルドの人に任せよう……」

なんか「コイツ、苦手だ。今までで一番、疲労が激しい。正直もう、鬪いたくない……」

「この天才的美少女ハンター、スイサイド・シェリルをここまでじずらせるなんてね。……まあ、良い経験になつたよ。ありがと」

と、横たわるガノットスの顔にキスをしようと口を近付ける……が。

「生ぐさこ……」

海の生き物なんだし、そりゃそりゃ。おまけにぬるぬるしてんじ。

帰りの船に揺られながら、呟く。

「とりあえず帰つたら……酒飲んで、美味しいもの食べて……お風呂入つて……寝て……」

私は今、かなり疲れているハズなんだけど……。

「……で、次はどのコとやるつかなあ……」

なんてセリフが出てしまう。

自ら

「死」という危険に飛込んでおきながら、「生」を勝ち取り、安息を得る。

……でもまた、あの 勇猛なワイバーン達と闘いたくなる。彼らの生死のやりとりが愛おしくすら思えてくる。

質の悪い病氣に架つてゐるようなものだ、モンスターハンターとう奴らは。

死ぬまで治らない病氣。

いいけどね、別にいつ死んでも、平穀無事に暮らすより、遙かに刺激的で楽しいんだし。

「来週あたりからまた頑張るーっと……」

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5376c/>

ガノトスさんを狩りに行こう！

2010年10月10日00時43分発行